

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	偽人物と史論家 : 論説
Author(s)	隈本, 繁吉
Citation	龍南會雜誌, 11: 4 - 10
Issue date	1892-11-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/3932
Right	

トナリ讓トナルコノ五者ハ即チ夫子ノ盛徳ガ外ニ發揮セシモノナリ故ニ時君敬信ノ至リ自ラ其政ヲ以テ就キテ之ニ諮問セシノミ子貢ノ對フル所、亦善ク夫子ノ德行ヲ觀タル者ト謂フベシ

夫子列國ニ周流シテ偶マ衛ノ邑ニ至ル儀ノ封人(儀ハ衛ノ邑、封人ハ封疆ヲ掌ルノ官、蓋シ賢ニシテ下ニ隠ル、者ナリ) 夫子ニ見エンコトヲ請ウテ曰ク賢者ノ此土ニ至ル吾レ毎ニ必ズ面謁ヲ蒙リ未ダ拒絶セラレシコアラスト從者乃チ引キテ之ニ見エンシム封人出デ、門人ニ對シテ曰ク二三子何患ニ於喪ニ乎、天下之無道也久矣、天將以ニ夫子ニ爲_中木鐸_上ト喪トハ位ヲ失ヒ國ヲ去ルヲ謂フナリ木鐸ハ振ヒテ以テ衆ヲ警ムル所ノ者ナリ封人一タビ夫子ヲ見テソノ先知先覺、教ヲ萬世ニ垂ル、ノ任アルヲ認メ遽ニ是語ヲ以テ之ヲ稱スソノ眼識ノ高キモ亦知ルベシ蓋シ封人觀感ノ間ニ得ル所アリ直チニ發シテ此ノ如キ贊歎ノ語トナリタルノミ而シテ夫子聖徳ノ厚キハ實ニ此數句ノ中ニ流溢シ千載ノ下宛然トシテ目ニ睹ル如シ

(未完)

僞人物と史論家

隈本繁吉稿

海の碧、山の翠、是れ自然のみ、茂樹鳥を栖ましめ、深潭魚を巢む、是れ亦た自然のみ、自然は性なり、眞なり、若し夫れ人あり、日月西より出て、樹梢魚躍り、水底鳥飛ぶと、絶叫するものあらば、誰か是を怪まざるものあらんや、否な是を信するものなかるべし、何ぞや、自然に非ればなり、眞に反すればなり、自然に反し眞に非るものは僞なり、所謂僞人物とは、他なき、其自然の性情を

矯るものを謂ふなど、其眞を蔽ふものを謂ふなり、

莫邪を利どま、鉛刀を鈍どす、天下皆首肯せん、然れども巧に正宗に擬せる一振の刀、巧に五岳に擬せる一幅の書に至ては、天下の多數、見誤ることなしとせず、彼の偽人物が、時の古今を問はず、地の東西を論せず、殘念にも往々社會の上流に、跋扈せるものは、實に天下多數の耳目を眩まし能く已を見誤らしむる(to overvalue)れ、一手段を奥の秘術とせるに因るのみ、乃ち彼れの慧にして猾なる、巧に世潮輿望に投ずるの機を操り之を制して以て自家立脚の地位を造る、既に地位を造る、社會は彼等に籠路せられ、其犠牲と爲り了るもの往々にして然り、彼れ、彼れの地位を造るまでよは、時として殊更に慷慨の涙を拭ふことあり、殊更に忠實の体面を装ふことあり、中情怯にして剛膽の風を装ひ、腦中無一物にして熱心家の情を呈す、表面の金玉は反て裏面の瓦石、君子と見えて實は夜叉、千態萬狀なりと雖、歸する所は、社會を瞞着して自家の方寸中を呼吸せしむるにあり、試みに是を二二の事實に徵せん、王莽、唐太宗は、支那史上好一對の偽人物にえて、一は是を以て敗を、一は是を以て成るを得たり、史に稱す、「莽色勵言方、欲有所爲、微見於風采、黨與承其意顯奏之、莽稽首涕泣、固推讓、上以惑太后、下以示信于衆庶、云々」と斯くして巧に自家立脚の地を得るに及び、欲望飽かず、白雉黃龍を夷蠻に徵して、已を周公宰衡と仰がしめたり、其劉氏の天下を奪ふに至り、非政連りに加はせ、馬骨忽ち露る、於是乎、長安城裡春夢未だ結ぶに暇あらず、醜首先づ飛んで亂刃の上に懸りたど、唐太宗に至ては、其晋末の騷亂を蕩平せし

の功に眩せられ、天下、其偽人物、偽善家たるに意を用る少なかりし、然れども、彼等の野心は、實に遠く兵を晋陽に擧ぐるは時又兆したり、彼は人民を塗炭に救ふか爲めに兵を擧げしに非ずして、自己は名利心、一李世民を驅りたるものなり、彼と伊尹の心無くして伊尹の事を行ふの人なりし、此故に自己の名利を保護する爲めには、其兄と弟とを殺して恬然たり、其所爲政治、悉く是を天真を矯め人情に近からざるもの、故に其親近する魏徵は、其人物を評して曰く、「勉強承諫、爾終不平」と、此一言以て太宗の偽人物なりきを証するに餘りあらん、

之を要するに、前二人は大奸、忠に似るの類なりし、似て而して非なる者なりき、當時の天下は、彼等の掌中に籠絡せられたるなり、古來の論者は、彼等の、始に忠良巧智を装ふは他、日野心の資たるもの、みなるを思はず、漫に寛假えて曰く、無不有始、鮮能有終と、それ眞に忠誠事に従ふの男子にして、不幸にして晩節を能くせざる者、天下亦た少からざるべし、然れども、偽人物の幼稚、と、彼等大偽人物が天下に寛假せらるるを見、意迎ひ心喜び、大膽に、も身を偽善に抛て怪まざるなり、是れ實に古今偽人物の世に絶へざる所以にして、成果陋醜、害毒至らざるなき、賈誼が所謂「鸞鳳伏鼠兮、鳴梟翔翔、闖茸尊顯兮、讒諛得志、賢聖遙曳兮、方正倒植云々」も、蓋し亦た是れが爲めのみ、

於是乎、眞摯潔泊の眞丈夫——聖賢——は、尋常の汚瀆、吞舟の魚を容るゝ能はずとし、濁世を遠て深く自ら藏るに至る、聖賢迹を潜むをば、斯に亦之に擬する厭世的偽人物生じ、殊更に放

論清談を試み、白眼冷笑的に一世を經過するを勉め、陰に世人の其人事に無頓着なるを視、彼れ賢者なり、彼れ廉士なりて、ふ好評辭を呈する、あらんを喜ぶの伏泉を具へり、晋末諸阮の如き、蓋し好一例か、

斯く論じ來れば、偽人物なるものは、其の已むに非るも、總て眞人物の行爲を假面とし、眞人物が自然に天與せらるゝ幸福名譽を、已むに來たさんとする野心を以て、影刻せる一偶像、否、一怪物のみ、

此怪物は、社會孰れの階級——小社會——にも其痕迹系統を有せざるなし、換言せば、其小社會の範圍内に於て之に相應するの怪物あり、當世人情の浮薄なる、青年學生なる一小社會に就て觀察するも、亦た清几淨窓の下、幾多の怪物羅列するあるやを覺ゆ、才子に非ずして才子然たるあり、正義を口よして心先づ不正に住む、妄りに慷慨し、妄りに着實を裝ふ、其内奥を探ぐれば爲にする所も出づ、學生の多數は之を見誤るものなり、況んや怪物と怪物と兩々相推し互に誣して、傑子と爲すに於てをや、多數が眩せられて才子とし、正義家とし、慷慨家と云、着實家と云、無論のみ、莊子曰、世俗之人、皆喜人之同乎己、而惡人之惡乎己、彼の偽書生が群を爲し、眞學生の享々たるあるを見、反て目して彼は陰險なり、偽善家となす、蓋し此の如くんば、我學生社會を如何せん、大任を負ふて將來糾紛たる社會に出づべき青年、先づ此醜風に薰するあらば、將來の日本人は偽人物の犠牲とならんのみ、怪物跋扈の燒點とならんのみ、孟子曰、惡莠恐其亂苗也、信なる

かな言、

嗚呼天下至る所怪物の胸背相接せり、其を如何せば、此怪物を識別するを得るか、此怪物は一種妙巧の機を具へ、人目以て辨すべからしむ、然をも正宗の偽刀は、刀劍鑑定會に於ては、最早其偽たるを蔽ふ能はず、五岳の偽筆は、書画展覽會に於ては、最早其偽たるを目白すべし、然らば則ち怪物亦何ぞ辨識すべからざるの理あらんや、何となれば怪物亦た其眞性——偽人物——を白狀するの時期來るをせばなり、前陳せし王莽を見よ、彼の篡奪は彼れが眞性を露はすの時期たりしに非ずや、換言せば、其利鈍を檢するの盤根錯節來りしものなり、眞偽を判するの一大厄運至りしものなり、春秋の世、毛先生一たび楚に使え、趙をして九鼎大呂より重からしめまや、十九人を顧て曰く、公等碌々所謂西人成事者也、是れ實は楚に使せしう、一大厄運に遇ひ、毛先生の驥足伸び、十九の怪物其眞を見とせしものたるや、疑なし、故に人物の眞偽を卜せんとせば、身先づ公平無私を希ひ、眼中規矩を具へ、徐ろに怪物が其眞性を暴露すべき、一大厄運を察すべし、苟も此厄運にして來らんか、其眞否利鈍の了然相判せらる、猶鑑定會、展覽會に於けると一般ならん、詩曰、輝々冕兔、遇犬獲之、他人有心、予忖度之、蓋し之を謂ふか、然りと雖、世間英雄傑士と稱せしもの、此厄運に遭ふなくして、一生を終るものに至ては、其眞相如何なりしもれか、果して怪物なりしか、或は否らざりしかを表白するを得ざりまもの亦た往々あるべし、彼等の中には、憐れに、毛當時人民の眼識なき爲め、怪物てう冤名汚稱の下に怨を吞

で地に入りしものもあらん、或は當時人民の無見識を利とし、賢俊てう好稱の下に巧に敗徳悖行を働さしものもあらん、それ然り、是に於てか史論家なるもの、要こそあれ、

史論家の要は、社會人物の真相を描き、後世をして眞の時態を追觀し、眞の人品を臆想せしめ、以て所謂褒善貶惡闡幽微顯の實効を擧ぐるにあるべき、換言せば、史論家は社會人物を判定する最終の裁判官なり、社會人物を未來に於て褒貶する一種の閻魔王あり、社會人物を天國に昇らしめ、或は天國より墮落せしむる一種の天使なり、史論家の位置は此の如く神聖なり、神聖なるが故に、彼の偏僻の見を持し想像の冤を人の尸上加ふる曲筆の史官、舞文の俗論者と、一步も此靈域に入るべからざるなり、

博覽せざるべからず、精察せざるべからず、然れども主として、好惡の偏心を去り、自家の胸中、玲瓏たる明月天地あるべきなり、千歳不變の照魔鏡あるべきなり、而して後ち其眼識、只規矩を踏まん、公平を失はざらん、史論家の本領は蓋し此の如きのみ、此故に曰はずや君子知己を後世に待つと、又曰とすや天定て又た能く人に勝つと、史論家たるものは、片時も其位階の至高なると同時に其責任の至大なるを忘るべからず、

從來の自稱史論家は、史論家の神聖を蹂躪し、妄りに史論を試み、成敗を以て是非を卜し、或之自説の異同を事の正邪に混じ、同ざる所に汲々矯飾して、完人を想像に置き、異とざる所に熱心誣毀を加へて醜像を空中に畫く、蓋し此輩反て彼の僞人物の繁殖を迎へ、引て社會の秩序を紊し、人

心をして天理應報を鑑むるの念を薄弱ならしめたり、

「シーザー」「クロムウェル」井伊直弼輩の如き其人物の眞偽今尙定論のあるなし、此等は其在時に於て彼の一大厄運を経たりしと雖、實に紛々たる自稱史論家の爲め、終に眞史論家をして正當の判決を下す能はざらしめしにはあらざるか、否らすんば、眞史論家の宣告ありしならんも、自稱史論家の喧嘩は其宣告を無聲裡中に埋葬し去りしにはあらざるか、

嗚呼眞の史論家起さよ、起きて而して此等神聖を汚瀆するの妖氣——自稱史論家——を拂ひ去り、徐ろに自家照魔の靈鏡を掲げ來り、古來彼の利鈍眞否を判つゝの厄運に遭遇せざるもの、及び遭遇せしも尙且つ未分明に附するもの、靈魂に、正當の宣告を下せ、顧ふに此等の靈魂が、彷彿として汝史論家の身邊を圍み、机上に臨み以て如何に已等を褒貶すべきやを凝視せしもの、是に至て喜ぶものあらん、悔ゆるものあらん、手を額に加へ、相祝するものは、我其冤枉犠牲たゞし名士の魂魄なるを知る、若し夫れ慚愧而を蔽ふて哭するものは、我其一世を瞞着せし所謂怪物の窮鬼なるを知る、

是に至て史論家の神聖、本領兩つながら全からん、日月光加はりて、妖怪魍魅伏す、天地の間、社會の情、それはに於てか天真に歸り自然に任せん、禽鳥和鳴、春光融融、山自ら翠に、海自ら碧ならん、